



抱へたる憲法の日の不発弾
 遠青嶺脚立自在にカメラマン
 花菖蒲廻る大奥廻るごと
 火柱の立つ如滝の落ちにけり
 若返る地球は句碑の青嶺より
 身ぬちより吹く薫風に帆を上ぐる
 梅雨に入る項を鋏切りけり
 聖書開けば五月の羊歯の匂ひせり
 箱庭に農一人置き雨降らせ
 反骨を貫き逝きぬ黒揚羽
 木の蜜を吸つて来世は黄金虫
 新緑や泣くのはここでない何処か
 冷奴人生力込めて生く
 *
 ホチキスを打ちて非戦や麦の秋
 若葉にも成長痛のありにけり
 唐澤南海子
 篠遠良子
 満田光生
 久保美智子
 清水道径
 長尾裕美子
 増田義幸
 宮坂やよい
 太田 薫
 安藤潤子
 松下勝昭
 佐久間梨江
 上條忠昭
 依田ひろ
 西澤日出樹

富士と背をくらべたる波立版古
 心体の浮腫みしリラ冷の夜よ
 色に出て四葩はとほき戦禍謂ふ
 顔もシャツもメコンの色よ鯨売り
 碑を囲み何かの孵る夏の寺
 なまぬるき木苺第二次性徴期
 子ども兵士やアフリカローズ届きをり
 短夜やふくらはぎには泣かさるる
 レシートの文字消えかかる夏の宵
 飼猫の傀儡となりて梅雨ひと日
 朧夜や宙のかすかに撓む音
 *
 憲法記念日潜水艦のうかぶ街
 初茄子の夜明けの空の深さかな
 まだ眉を持たぬ小芥子や柿の花
 弾全て捨てよと林檎摘果する
 岩上諒磨
 三品吏紀
 松本よし乃
 田村道子
 西村美枝
 森山夕香
 丸山盛久
 渡辺正剛
 高橋秀雄
 稲垣敏子
 山崎和之
 宮沢久子
 高瀬かず枝
 草野薫子
 田中信寿

——同人集・岳集・青雲集から

宮坂 静生

巻頭寸言 俳句詩型（五・七・五）とはなにか。七十年間のマラソンの果てに、幾分見えてきたことがある。それを中村草田男の俳句を例に一言記す。草田男の〈冬の水一枝の影も欺かず〉は思いと景が見事に一体化した隙がない最高の作品。〈萬緑の中や吾子の歯生え初むる〉は俳句作品の典型句である。「吾子の歯生え初むる」はわが身の喜びを的確に形象化し、夏の湧きあがる「萬緑」の呼びかけに気付き応えている。私はそれを○・五の自分と○・五の自然との呼応という。付け加えるならば、「萬緑」は「歳時記」に載る「緑」のみんな用いる季題を草田男が自分の眼で捉え直した「地貌季語」（私の生活感からの独自の気付きの季語）である。

なんと手近な大奥よ——花菖蒲幻想

花菖蒲 廻る 大奥 廻る ごと 満田 光生

水郷など水辺の花菖蒲の群落を廻りながらの幻想である。作者は蕪村の研究家なので、大奥への知識も関心も凡人よりは鋭いはず。あまりにも手近な気がするが、あれこれ知識を開陳するには俳句は短いので、蕪村流に映像明快にえいやと端的に表現した。將軍に気に入られんと容顏の限りを尽くす。

あでやかな花菖蒲を大奥の暗喩とするとは、真面目な漫画風なユーモアもあるう。

抱へたる憲法の日の不発弾 唐澤南海子

憲法九条の戦争放棄の条文と自衛隊の存在との矛盾をどう解決するのか。「不発弾」とはそこを衝いたものであろう。ときに論理の明快さよりも現実の不合理が時代の当座の平和を維持するのも真実である。すべてがこの論理でうまく行くわけではない。が、政治の世界とはなによりも世界に戦争がなく暮らせることを優先してほしいものである。

反骨を貫き逝きぬ黒揚羽 安藤 潤子

前書に「小泉信さん」とある。このたび「岳」四十五周年記念大会に申し込みながら直前に逝去された信さんは、かつて古くは社会党代議士の秘書であった。生涯反骨を貫いた。俳句は時に饒舌であったが、性格が真面目で、この上なく温和。にこやかな信さんはみんなから愛された。「黒揚羽」を配し讃えた作者の見識に敬意を表し推薦句に推した。

火柱の立つ如滝の落ちにけり 久保美智子

滝の激流を正反対の「火柱」で喩えた大胆さに注目した。

が、この手法は案外類想を伴うもので、鮮やかな点が愛されるのであろう。それにしても、滝の水流を見つめていると水から火という矛盾した実感が湧いてくる不思議さがある。

若返る地球は句碑の青嶺より 清水 道徑

句碑除幕をお詠みいただいた句が多い中で、掲句に注目した。真にスケールが大きい。地球の若返りに句碑を取り巻く青嶺を捉えた発想は類を抜く。姨捨の地がこのように未来志向で詠まれたことはないであろう。驚嘆し、感銘した。

身ぬちより吹く薫風に帆を上ぐる 長尾裕美子

爽快なヨット詠である。ヨット自らの快走を詠み、巧み。

梅雨に入る項を鉢江りけり 増田 義幸

理髮詠。さりげない軽い詠み方に詩情の発見がある。

聖書開けば五月の羊歯の匂ひせり 宮坂やよい

今月の秀句

遠青嶺 脚立自在にカメラマン 篠遠 良子

快活なカメラマン像の造型が珍しい。脚立を持ち運び自在に据える。そこへ飛び乗り、「はいこちら」と大声を発しみんなを手元のカメラに注目させる。高みの四圍は青々とした夏嶺。一句の構図もダイナミック。作者は注目の実力俳人。

季節の気付き方が鋭い。知的な感受性を常に鍛えている作者。聖書と五月の羊歯との詩情が丸やかで心地よい。

箱庭に農一人置き雨降らせ 太田 薫

土俗的なユーモアが生きている。地面からの愛情が滲む。

木の蜜を吸つて来世は黄金虫 松下 勝昭

素朴なアニミズムが楽しいでないか。童画風な現実味も。

新緑や泣くのはここでない何処か 佐久間梨江

中年にさしかかった恋心の句か。ナイーブでかつオープン。

冷奴 奴人生力込めて生く 上條 忠昭

九十代の作者。元氣そのもの。一日一日がいのちとの対話。

雪嶺集・前山集から推薦候補作をあげる。

滴りにねばりのやうなものありぬ	奥山	源丘
梅雨夕焼ひさし周一健三郎	堤	保徳
憲法記念日揉み解したる土踏まず	辰野	利彦
微笑の来てももの形のあらはなり	高橋	節子
桐咲くや峠に人と別れゆく	長島	環
ガンガーの水葬のごと白紫陽花	中澤	良子

成長痛を「若葉」に感じるとは一日々アニミズムの生き方

若葉にも成長痛のありにけり 西澤日出樹

人間の身体感覚が素直に若葉へ移される驚き。急に緑深く

なる。中にはお日様により無理やり引っ張られた葉っぱもある。若葉の気持が判るとは見事な感性である。

富士と背をくらべたる波立版古 岩上 諒磨

北斎の赤富士を描いた立版古であろう。厚紙での立体紙芝居が流行り出している。わが家にも暑中見舞いに届く。人は気持次第、玄関先に飾ると涼味を感じるから不思議。

心体の浮腫みしリラ冷の夜よ 三品 吏紀

身体ではなく心体とある。北海道のリラ冷の夜を背景に沈鬱な思いを吐露している。単に病的な浮腫みを表現した句ではないであろう。不思議なところが伝わるようだ。

色に出て四葩はとほき戦禍譚ふ 松本よし乃

戦時中の紫陽花の色を思い出したのでであろう。忘れられん

今月の秀句

ホチキスを打ちて非戦や麦の秋 依田 ひろ

例えばロシア・ウクライナ戦争反対とのピラにホチキスを打つ。白い無傷の紙に突然ホチキスが打たれる残酷さ。紙は飛び上がる痛みがあろう。無垢の民に弾を撃ち込む無惨さどこかで通じる。私は直観的に矛盾を感じた。他愛もないことながら、人間の持つ深い感情を卑近なことで感じさせる句は優れている。感心した所以である。

る。他に下平重人さんも同様の経緯で戻る。大いに期待したい。掲句は、レジで貰ったレシート。その文字がいくらか薄い。俳句にならないようなところに淡い詩情を見つける名人。健在！

飼い猫の傀儡となりて梅雨ひと日 稲垣 敏子

こつこつと鈴鹿から投句される作者。ようやく注目句に出会いうれしい。私の大学同期の川北富夫先生のもとで短歌を学んで久しいと聞いていた。梅雨時に家猫が操り人形のように腑抜けてしまったという。老猫であろう。

臙夜や宙のかすかに撓む音 山崎 和之

巧い句である。これが宇宙の実体か。臙夜だけに朦朧とした中に第六感で捉えた宇宙のかすかな撓み。音を発するとは凄。長野市の次代を担う期待の作者。着眼がユニーク。

青雲集

憲法記念日潜水艦のうかぶ街 宮沢 久子

横須賀在住の作者。自己紹介のようであるが、身近に感じて暮らす矛盾を句にすればまさにこれ。明快である。「矛盾」の指摘こそ俳句の句材になることを覚えてほしい。

初茄子の夜明けの空の深さかな 高瀬かず枝

早起きした夏の朝は紫紺。茄子が今年初めて穫れる。ささやかな嬉しさ。背景は関東平野。栃木県の作者。同地から多くの誌友が入会された。「岳」四十五周年大会にも早速参加

とする感情をもう一度確かめて置きたい。そんな句である。

顔もシャツもメコンの色よ総売り 田村 道子

メコン川の総売り。忘れ難い光景なのである。東南アジアの地を踏むことがなく、視野が狭いまま来てしまった私は作者のバイタリティーに感心する。

碑を囲み何かの懸る夏の寺 西村 美枝

虫か鳥か。このように碑も寺に風景として馴染んでゆく。自然はたちまち人工の産物を呑み込んで風景化する。感動！

なまぬるき木苺第二次性徴期 森山 夕香

野の木苺を摘んだ。日に当り生ぬるい。少女を連想する。体形がふくよかになり、感情表現が激しさを持ち出す。地味な木苺への着眼が手堅い。

子ども兵士やアフリカローズ届きをり 丸山 盛久

子どもが兵士になっている。アフリカローズの薔薇との取り合わせが俄かに現代史の舞台に引き出された感じ。句材の選択、着眼が重厚である。

短夜やふくらはぎには泣かざる 渡辺 正剛

夜中にふくらはぎが吊るのであろう。九十歳の正剛大人、命がけて俳句に取り組んでいるという。立派。さすがである。

レシートの文字消えかかる夏の宵 高橋 秀雄

信州大学学生俳句会で、ユニークな作で知られた作者。高校の先生を定年退職し、若き日に馴染んだ俳句に再び復帰す

され、ともに喜び限りなし。わが家の子猫の額ほどの前裁でも先日初茄子が一つ穫れ、一日うきうき。いい句である。

まだ眉を持たぬ小芥子や柿の花 草野 薫子

初登場の作者であるがベテランの句風。巧みである。雛に目を入るとい句は長谷川權に「目を入るととき痛からん雛の顔」があり名高い。掲句は小芥子なので直接かわりないが、鄙びた小芥子作りの作業場と柿の花の取り合せはバランスがよい。この先、自然の生命感溢れる句へどのように挑戦されるか楽しみだ。

弾全て捨てよと林檎摘果する 田中 信寿

発想が凄い。初夏、林檎の摘果をしながら世界から戦のものとなる弾を全て除去せよという。爽快この上ない。句材が生きて生きている。還暦の作者。青春はこれから。

他に岳集・青雲集から推薦句を掲げる。

銃身の黒き象嵌薄暑光 瓜田 紀子

けたたましき巢立の声や濯ぎ終ふ 川村 五子

わたすげの風の行方は知らざりき 横地 妙子

麦は黄に磨き上げたる大薬缶 牧野きよ子

テディ・ベアへ父の夏帽かぶせおき 服部美智子

柿若葉忘れかけをるひとの声 広枝千鶴子

笹だんごはんばぎぬぎの盛り上がる 渡辺 真帆

卒業や大縄飛びの十二人 丸山 宏子

青時雨鳥みな器量良かりけり 飯森 晴美

はつなつの海や同心円に地震 松井 弓

満洲を伝へ翁逝く梅雨の月 松葉 孝子